

## 第1回 今後の成田空港施設の機能強化に関する検討会 議事要旨

日時：令和6年9月24日（火）16：00～17：40

場所：中央合同庁舎3号館8階 特別会議室

### 議事要旨

- 各委員の承認により武蔵野大学経営学部特任教授山内弘隆氏が委員長として選任された。
- 事務局（国土交通省航空局）、成田国際空港株式会社、各航空運送事業者、地方公共団体（千葉県）、学識経験者各委員より説明及び意見が述べられた。
- 成田空港の機能強化とあわせて旅客取扱施設や貨物取扱施設等の整備を行うことの重要性が確認された。
- 十分な取扱容量、乗継を含めた利便性や快適性、効率性等の様々な観点を踏まえた上で、今後成田国際空港株式会社により空港施設の整備が行われることが必要であることが確認された。

### （委員等からの主な説明及び意見）

- 成田空港は国際線のメイン空港としてアジア有数のハブ空港を目指すこととしている。今後の首都圏空港の更なる需要は成田空港の発着容量50万回化により受け入れることとなる。それにあたり旅客や貨物を受け入れる施設等を整備する必要がある。量と質を備えた施設とすることが必要。旅客の国際線の乗継需要及び国内線への乗継需要、貨物の国際継越需要を取り込む施設とすることも重要。
- 旅客ターミナルは集約ワンターミナル方式によって効率化や利便性、快適性などの要素を満たしたものを整備し、貨物施設は集約してフォワーダー施設や隣接地と一体的運用や自動化などを行っていくことで効率化等を図る。
- 旅客についてはインバウンド需要の取り込みが重要、加えて北米ーアジア等の国際流動を取り込み成田空港を巨大ハブ空港にすることが重要、そしてインバウンド旅客の地方送客が重要。利便性、快適性、定時性を高める施設整備が必要。
- LCCのビジネスモデルも維持可能とする施設とすべき。
- 貨物機に対応した十分な駐機スポットや空港外輸送へのアクセス、安全かつ機能・効率的な貨物上屋が必要。加えて国際競争力を備えた貨物施設の集約が重要。
- 施設整備とあわせて自動化等の先進技術の導入等を行い、旅客・貨物取扱のほか脱炭素等も含め、国内外のモデルとなる成田空港とすべき。
- 生産年齢人口が減少する中、生産性の向上や良好な業務環境の構築等により、空港職員にとって魅力的な空港ターミナル・貨物施設とすることが必要。
- 成田空港を地域住民も楽しめる施設とし、エアポートシティ実現に欠かせない交通ネットワークの充実に繋がることを期待。
- 我が国の航空ネットワークが縮小しているため、国力が低下する危機感を持っており、航空サプライチェーン強靱化のために成田空港の果たす役割は大きい。
- 航空機や旅客・貨物などが安全かつ柔軟に流れるよう、エアサイドとランドサイドを統合・整理した設計・構築をすべき。
- 自動化にあたっては、電源やスペースの確保についてこれまでと異なる思想で空港と事

業者が議論しながら設計等を行うことが必要。

- 貨物施設の集約に際しては、新たな交通の集中等を発生させないよう十分なスペースの確保等が必要。また、集約にあたってはスケジュールを事業者に示して計画的に進めることが必要。
- 交通はネットワークであるため、空港施設とは空港本体に存するものだけではなく空港外で関連しているものも含まれることを念頭に検討を進めるべき。
- 施設全体における配置や運用の効率化や最適化というマネジメントの考え方が重要。未来のイノベーションや様々な状況の変化に柔軟に対応出来るようにすることが必要。
- 貨物を取り巻く環境は大きく変化している。物流のクオリティーはネットワーク全体で対応することで上がる。その要は空港であり、エアライン、フォワーダーでもあるため、これらをマネジメントする必要がある。

以上